近世の山陽道 ～庶民も歩いた物見遊山の道～

江戸時代になると、江戸・日本橋を起点とする東海道・日光道中（街道）・奥州道中（街道）・中山道・甲州道中（街道）の五街道が整備されます。伝馬制の実施や宿の設置が行われ、宿には人馬の常設が義務付けられるなど、律令時代以降初めて中央と地方との連絡網が幕府直轄で定められました。

京都から瀬戸内沿いに山陽・九州方面に向かう西国街道は、五街道に次ぐ重要な脇街道として整備されました。東寺（京都）を起点に、伊丹市下河原で兵庫県に入ると姫路市内の別所、青山を経て船坂峠（上郡町梨ヶ原）で県域をでます。途中、美作道や室津道などへの分岐点も有していました。そのルートは古代・中世の山陽道とほぼ同じで、現在の国道2号とおよそ重なっています。

近世の山陽道である西国街道は、諸産業の流通路として、また参勤交代の道として利用されました。江戸中期になると、伊勢参宮をはじめとする寺社参詣や名所旧跡を訪ねる物見遊山的な旅も庶民の間で広く行われるようになります。『播磨鑑』（宝暦12年（1762年））といった地誌をはじめ、名所・旧跡を記す『播州名所巡覧絵図』（享和4年（1804年））、参勤交代用に記された『行程記』（宝暦末期（1760年頃））といった書籍や記録も数多く残されています。

宿駅制度

慶長16年（1611年）頃、幕命によって作成された『慶長播磨国絵図』を見ると、山陽道沿いに○を付したところが見られます。これが宿駅（宿場）とみられ、播磨の西国街道には「王子町、加子（加古川）、五ちゃく（御着）、姫路、片島、西うね（有年）」の宿駅がありました。その後、寛永年間に大久保や鵤、正条などの宿駅が追加されました。また、時期は不明ですが、王子町の宿駅が明石、そして大蔵谷村へ、西有年の宿駅が東有年へ移ったことも分かっています。

これらの宿駅は古代の山陽道同様、庶民のために作られたものではなく、領主階級が利用するものでした。もっとも播磨の宿駅は、海路交通が盛んだった江戸初期にはあまり利用されなかったようです。18世紀初頭になると、参勤交代に陸路を利用する大名が増え始め、彼らを迎える本陣が整備されるようになります。姫路城下では国府寺家（本町）、椀箱屋（竪町）、那波屋（西二階町）の三軒が本陣（身分の高い旅行者のための宿泊施設）を務めました。

■播磨の宿駅（『五駅便覧』※による）

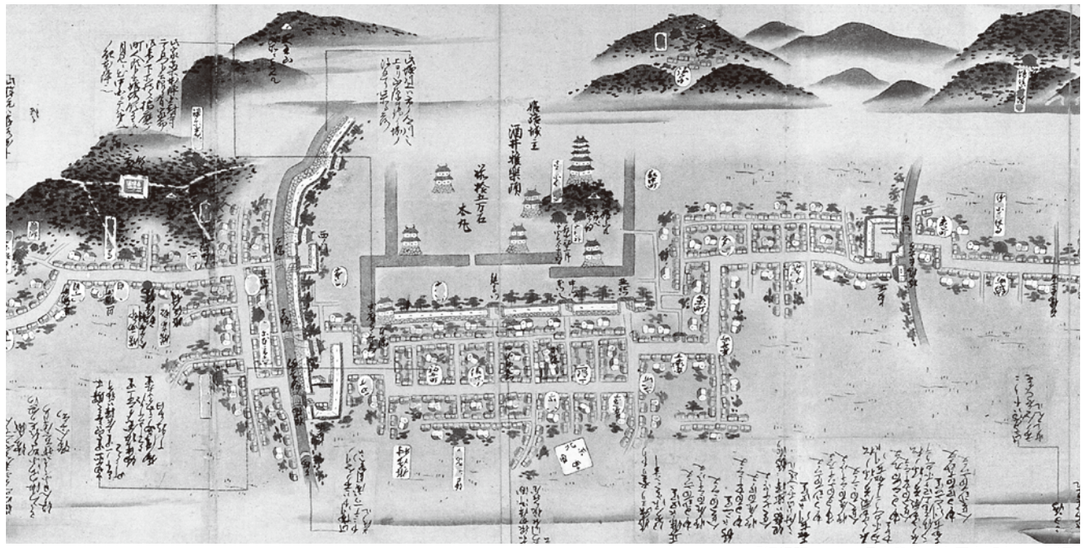
駅名	比定地
明石	明石市大久保
加古川	加古川市加古川町
御着	姫路市御着
姫路	姫路市中心部
鵤	太子町鵤
正条	たつの市揖保川町正條
片嶋	たつの市揖保川町原
有年	赤穂市有年

※幕府の道中奉行所の役人が編さんしたもので、五街道の駅間距離などが記されたもの

文献で見る西国街道

『行程記』

宝暦末期（1760年頃）、萩藩の絵図方役人である有馬喜惣太（ありまきそうた）が描いた『行程記』。藩主の参勤交代の際に各地の様子を知ってもらい、旅を楽しませるために作成されたもので、巻首から見ると江戸へ向かう「登」に、巻末から見ると萩へ向かう「下り」になる趣向が凝らされています。播磨に関する巻は登六（備前国上道郡藤井駅～播磨国印南郡賀古川）と登七（播磨国印南郡賀古川～摂津武庫郡西宮）で、これらとは別に瀬戸内海から播磨（坂越、室津）に上陸する場合の経路を示す巻も作られました。現在、山口県文書館が保存しています。



『行程記』　山口県文書館　宝暦末期（1760年頃）

『播磨めぐり』

明和9年（1772年）に発行された当時の旅行用ガイドブック。作者は田原相常で、『播磨巡覧記』『播磨めぐりの記』などと書名を変えて、何度か再版されました。姫路については「御城ハ山手にあり。城下町多し。はんじようの所なり○惣社大明神。侍町に有。大己貴命を祀る也。軍八頭正一位惣社大明神といふ額をあげられたり」と記されているほか、書写山円教寺、増位山随願寺、八家地蔵、龍門寺などの名も見られます。

『播州膝栗毛』

享和2年（1802年）、戯作者・十返舎一九（P54）が弥次・喜多を主人公に書き始めた『道中膝栗毛』は、大人気となり約20年間書き継がれました。『播州膝栗毛』では姫路、御着、石の宝殿、曽根天満宮と播磨の名所を舞台に滑稽な物語がつづられています。姫路については、弥次郎兵衛が旅の娘に夜這いをかけようとしたところ、狸に化かされて大騒ぎとなる話が描かれています。